

## 老船長の夢と現実

—コンラッドの『追いつめられて』について—

秋葉敏夫

### (1)

作家とはいったいなにか、まずそんなところから話をすすめてゆきたい。作家というのは漠然としたことばだが、いわゆる芸術品一般の製作者を指し、狭い意味では、文学作品の製作者のことだという。そしてなにかものを作ったり書いたりして、それを広く世間に発表するひとのことらしい。少なくともプロにもアマチュアにも共通する、作家の定義はそれまでで、このさきの相違は両者の性質によるだろう。つまりそれはプロかアマチュアかという違いだし、問題はプロの作家はそれで生計を立てている、または金をもらっている、ということである。それに、この「ものを作ったり書いたりして生計を立てる」というのは、けっしてなまやさしいことではない。収入の不安定さは、程度の差こそあれ、いつも作家の頭を悩ます問題となる。そしてこのことが、ひとにもよるが、作品に微妙な影響を与えないわけではないだろう。

文学作品の場合、経済的にいって、まだ小説は詩に比較すればよい方である。やはり小説の読者は数が多い。ところが詩になると、ものごとはずっと深刻で、それで収入をあてにするなど狂気の沙汰だ、と一蹴されるかもしれない。英国の詩人ロバート・グレイヴズ(1895～ )によると、世間には、詩は金にならない、だから売れるのは詩ではない、といった通説があるという。それ故、詩を書いて安楽な生活をすれば、その詩は詩ではないはずだし、そのひとは嘲笑される危険がある、という意味のことを彼は述べている<sup>1)</sup>。グレイヴズ自身、生活のために小説を書いたりしたこともあったが、詩人であれ小説家であれ、なにかほかの仕事で生計を支えているものは、現在でも非常に多いだろう。

収入の不安定さが作品に影響を及ぼすというのは、ほんらい、望ましいものではない。そんなことはむしろあってはいけないことだろう。そうした影響のよかったためしはまずないし、作品は独自の立場から創造されるに越したことはないからである。だが実際は、理想と現実の差は明白である。そして生計を支える目的のために、たとえば小説家の場合、その関心の一部は、ややもすると、出版社の事情や読者の好みに振り向けられる。現在では少ないだろうが、作品をもっと短かくせよとか長くせよとか、この描写を変えろとか削除せよとか、いわれることがあるかもしれない。また読者の好みに合わせて、自分自身、こういう主題のものがよいとか、こういった人物を登場させようというふうに、考えてくる場合もあるだろう。しかしながら、これらの事情を踏まえて出来上がった作品も、批評されるときは、そうでない場合と同じ立場におかれることになる。作品の価値を決めるのは、あくまで創造された作品そのものであって、各

種の執筆事情を斟酌する甘さなど、そこには少しも見られないだろう。

この小論で取り扱かう『追いつめられて』(*The End of the Tether*, 1902)の作者、ジョウゼフ・コンラッド(1857~1924)も、晩年に近い頃まで、経済的に苦しんだ作家のひとりである。彼はポーランドの地主階級の出身で、その誇りを捨て切れない気質のためか、生活程度を落とすことはできなかつたらしい。執筆だけで生計を支えるようになってからも、作品の売れ行きは順調でないで、彼は次から次に借金を重ねてゆく。そしてそれと同時に、その穴埋めのため、この作家は執筆の労をせきたてられることとなる。彼自身の手紙のなかに、作品がいくらで売れたとか、執筆がなかなかすすまないといったことばが多いのは、性格にもよるのだが、一部その事情を物語るものだろう。また掲載雑誌の性質を考えた内容の選択や、作品の長さに関する出版社との相談なども同様である。じっさいコンラッドの小説を見ると、それらはいわゆる出来、不出来の差がかなりはっきりしている。それに同じ作品でも、前半と後半とで主題の統一が乱れたり、その展開が不充分だったり、雰囲気の不調和なほど異なる場合がある。これらの理由はけっして単純ではないはずだが、たとえばそのひとつに、主題の効果的な展開と帰結に必要な、作家の緊張感や忍耐力の欠如といったものが考えられる。さらに別の面では、経済的な配慮から、彼が出版社の事情や読者の好みをあまりにも重視した結果だ、とも想像される。ジョン・ゴールズワージー(1867~1933)への手紙のなかで、コンラッドは「次に申し上げたいのはある種の妥協——人気の必要性に対する譲歩のことで。そのためになにかをしななければいけません<sup>2)</sup>」と書くのである。もしそうでもなければ、この作家は、たとえばなぜか扱かうのが不得手な男女の恋愛を、物語の雰囲気を損なうほど、自分の作品に持ち込んだらうか。

コンラッドは40歳近くで職業作家として出発する。しばらくたつと、彼の名前は少しは知られてきたらしい。ただそれも専門家の間のお話であり、彼はけっして一般読者の十分な人気を得るまでにはなっていない。彼がその幸福を勝ち取るには、作家の代表作とはお世辞にもいい難い、晩年のメロドラマ的作品『運命』(*Chance*, 1912)まで待たなければならぬ。駆け出しの頃の彼は、それでも、結構批評され、好意的に迎えられた方だろうか。当時はちょうど小説における文壇の交代期だったし、異国情緒豊かな東洋や英国人の好む海といった題材は、彼の知名度に幸いしたと思われる。最初の作品『オールマイヤーの阿房宮』(*Almayer's Folly*, 1895)が世に出て4年ほどすぎたとき、ブラックウッド誌の編集長兼出版社主、ウィリアム・ブラックウッド(1836~1912)の手紙によると、すでに彼の雑誌に掲載された「青春」(*Youth*, 1898)と『闇の奥』(*Heart of Darkness*, 1899)はもとより、作家コンラッドの名前は、アカデミ誌賞受賞者のひとりとして、ずいぶん人びとの口にのぼるようになっていて、という意味のことが述べられる。そして彼はコンラッドに、それらを単行本として出版できたら申し分ないだろう、と提案する<sup>3)</sup>。コンラッドの方は次の日、さっそくそれに答えて、「わたしとしては、アカデミ誌賞によって授けられたような人気を、ぜひとも利用したいのです<sup>4)</sup>」と述べている。またその単行本に収録されるものとして、彼はまだ執筆中の短編「ジム」(*Jim*)を予定する。ところがこれは、およそ14万語ほどの大作『ロード・ジム』(*Lord Jim*, 1900)に発展し、もちろんそれだけで独立した単行本となる。このあとしばらくの間、彼は比較的短かい作品を書いてゆくが、いつも「青春」や『闇の奥』との単行本のことを頭において

いたらしい。それに適したものとして、この『追いつめられて』が完成するのは、結局、1902年の秋になってである。作家自身の説明によれば、これは人間の青春期を扱かう「青春」や成人期の『闇の奥』と対をなす、老年期を描いた作品だという<sup>6)</sup>。この小論は、その『追いつめられて』の主題を中心に考察しようとするものである。

## (2)

『追いつめられて』はざっと47,000語ほどの作品だが、本質的には、短編の領域に属していると思われる。つまり、この作品はかなり長いにもかかわらず、そこに広範囲な世界の描出や物語の複雑な展開は見られない。作者の焦点は脇道にそれることがない。ただそれほど錯綜しているわけではない、主人公の精神的葛藤や行動がだらだらと続いてゆく、といった感じなのである。作家コンラッドがいつも詳細な創作ノートを用意したかどうかは不明である。だがじっさいのところ、『ロード・ジム』の件のように、彼自身、作品が完成するまでは、その長さもわからない場合が多かったのではないか。この『追いつめられて』がはじめてブラックウッド誌に載ったとき、その半ば以降はもちろん出来上っていない。それに、この作品はけっして作家のよい部分を代弁するものではない。『追いつめられて』にはいくつかの欠点があり、その大きなものは、読むのにかなりの忍耐力を必要とする、物語の遅い展開だといってよい。作品集「青春、ほか2編」(*Youth, a Narrative, and Two Other Stories*)は、「青春」や『闇の奥』とともに、この作品を収めるものである。それが出版されたとき、批評家の間で、『追いつめられて』は前2者よりやや簡単に扱かわれたが、それでも結構好評だった。しかしジョン・メイスフィールド(1878~1967)の論じるように、「3番目の作品『追いつめられて』はさらに詳細な創作です。もっとも、少し退屈だし文章も散慢です。結末の生彩ある描写は文句をいえないほどなのに、散文と風景が同じ量のつたのごとく、中心人物のまわりからみついてゆくのです<sup>6)</sup>」という書評があるのは当然なことだろう。

物語がだらだら冗漫に続くというのは、ひとつには、長さに関する出版社の要求のためかもしれない。そのうえ、物語の中味が意外に貧弱だったせいとも考えられる。だが読者にそう感じさせるのは、少なくとも、主題の提示とそのドラマ化がやはり成功していないことを示している。たとえばコンラッドがほかの作品で行なう小説技法の試みも、この『追いつめられて』では、ほとんど注目すべきものはない。場所に特別な意味を込めるわけでないし、物語が過去にさかのぼってドラマ化されてもたんなる報告に終るので、時間の処理もまず平凡である。おそらく、2 たくみなエピソードの使用を除くと、なかなかすまぬ物語の足取りやものごとのくどさが、なにか印象に残るだけだろう。この『追いつめられて』のコンラッドらしさは、むしろ扱かわれている主題と、船長を主人公とし、海が舞台になるといった表面的なところからくる。前者はあとで詳説するとして、後者については、例によって、作家自身の体験が一部利用されているらしい。この場合は、2等航海士の頃乗り組んだヴィダー号での、マライ群島周辺の体験だという。つまりコンラッドの作品系列において、この作品は海に関係する物語群のひとつで、すでに書かれた『ナーシサス号の黒人』(*The Nigger of the 'Narcissus', 1897*)や「青春」や『台風』(*Typhoon,*

1902) に続くものとなっている。

それら海の物語群のうち、主題の点からいえば、この『追いつめられて』は『ナーシサス号の黒人』にかなり近い作品だと思われる。舞台はそれぞれ蒸気船と帆船で、その差異の微妙な影響があるにせよ、作家の関心は類似したところを狙っている。大ざっぱな方がいい方だが、それを要約して、人間心理の脆弱さ、さらには「悪」とみなすべき人間精神の奥底、といてよいだろうか。そのうえ、両作品の船長に寄せる作家コンラッドの視線は、けっして異なるものではない。帆船から蒸気船への移行期における、時代の変化、価値観の変化が、作品の雰囲気の色濃くおおっている。『ナーシサス号の黒人』の船長が抱く、新しい世代に対する不安、懸念は、ある意味では、『追いつめられて』の船長の破滅として具体化される。そしてこのことは、彼の思考の甘さや、現実についての認識不足と結びついている。この辺はもはや『ナーシサス号の黒人』から離れた世界だろうか。ただ、もうひとつ付け加えねばならない『追いつめられて』の注意点は、娘に対する船長の愛情といった側面が導入されることである。彼女はじっさいには、補足的な最後の場面でごくわずかに登場するにすぎない。だが船長の行動の動機となり、その行動を支配するのは、いとしい彼女の存在なのである。そして親が娘に抱く愛情というような、ひとつの家庭面の導入は、いわば男だけの世界を描き、その自己認識や自我の確立を扱かうことの多い、コンラッドの海の物語群において、異彩を放つものである。

ところで、この『追いつめられて』の物語を簡単にまとめておきたい。主人公のウェイリー船長は、以前、有名な快速帆船を指揮して「むこうみずなウェイリー」とあだ名された、輝やかなしい経歴の持主である。彼はもう67歳で、自分の価値を充分意識している。そしてその頑丈な身体や落ち着いた態度のなかに、彼は自信とか自尊心といったものを秘めている。ただし時の流れは非情で、妻に先き立たれた船長は、愛する娘を不幸な結婚に送り出し、資産は銀行倒産で失くしてしまっている。彼に残されたのは、いまや、老後の楽しみに買っておいた小さな帆船「フェア・メイド」号と、いとしい娘のアイヴィだけにすぎない。それ故この娘が健康のすぐれない間抜けな男と結婚し、子供を2人かかえて生活に苦しんでいるらしいのが、船長にとって、もっとも気がかりなことである。下宿屋を始める娘が200ポンドの資金援助を求めたとき、彼は大事な「フェア・メイド」号を売り払って、その金額を工面する。将来のためを考える船長は、500ポンドは手元に残し、使わないようにしている。だが生計の道を立てるのに船以外考えられないウェイリー船長にとって、いまは指揮する船の職がなかなか見つからない時世である。彼は結局、相棒の出資者を探しており、かなり評判の悪いマッシーに、大事な500ポンドを出して、ソファアラ号の船長となる。

このようなウェイリー船長の過去は、それほどドラマ化されないで、ほとんど作家の全知の立場から説明的に報告される。そして物語の中心は、経済的に困惑する老年期の人間の、最後の出来事を扱っている。ウェイリー船長は現在、マライ人の水夫長を片腕に使う、蒸気船ソファアラ号の指揮者である。この船はマライ群島周辺をめぐる小さな貿易船で、乗組員の数は少ない。おもなところでは、主人公のウェイリー船長、出資者で機関士のマッシー、運転士のスターン、それに2等機関士ジャックとマライ人の水夫長である。このうち2等機関士と水夫長は、物語の展開にほとんど関与しない。マッシーとスターンは現

実対処のうまい、自分勝手な人間たちで、とくに前者は老朽したソファアラ号に嫌気がさしており、後者は自己の出世のことばかり考えている。操舵中ウェイリー船長と水夫長のマライ人はいつも一緒だが、それをげんそうに見つめるマッシーの描出はたくみである。そしてこの場面の暗示するように、船長はひとりでは指図できないほど、視力を失くしている。だが出資した500ポンドが取れなくなるのを恐れて、彼は船長を辞めることはできない。視力喪失の事実、彼の努力にもかかわらず、スターンに気付かれ、スターンを通してマッシーにも知られることとなる。ソファアラ号におけるスターンのももとの魂胆は、自分が老船長の後釜にすわることであり、彼はウェイリー船長の卑劣な行為を非難しようとする。一方マッシーは保険金策取を思い付き、故意に事故を起こそうと考える。そこで彼は、鉄の棒をポケットに隠した上衣を使い、羅針盤の針を狂わす。マライ人の水夫長はその策謀がわからず、彼の助けを借りるだけの船長は針路を誤まり、船は暗礁に乗り上げてしまう。そして5分もたてば、船は沈む運命にある。題名『追いつめられて』ということばは、ちょうどこの場面に出て来る。

「保険金をだまし取ろうとした罰で、わたしは刑務所へゆくことになるだろう。でも、あなたのことだって明るみに出ますよ。正直という評判なのに、わたしを欺き続けてきたあなたのことだって。あなたは少ししか金がない。そうでしょう？ あの500ポンドしかないでしょう。いや、もう、まったくのすってんでんさ。船は失くなるし、きっと保険金は払われないから」

ウェイリー船長は動かなかった。本当だ！ アイヴィのお金なのに。この遭難で失くなっちゃうのだ。彼には再び、ものごとがちらっと見抜けた。彼は本当に追いつめられてしまったのだ<sup>7)</sup>。

船長とマッシーの口論はすぐに終る。生き延びたい衝動に駆られ、マッシーはスターンの待っているボートに移る。だがウェイリー船長は、仲間の説得に耳を借すことなく、船といっしょに沈んでゆく。

すでに触れたことだが、この作品には小説技法の面で注目すべきところは少ない。物語はけっして複雑ではないし、緊張感をそれほど伝えることなくただのろのろと破局に向かってすすむだけで、1、2のエピソードの使用を別にすれば、対比が効果的に使われている点を付け加えればよいだろうか。すなわちウェイリー船長の過去の栄光と現在の状況、他からの信頼感と自己の良心の恥ずべき行為、彼自身の夢と現実、また古い世代の船長と新しい世代の思考の相違といったものの対比である。そしてその対比の効果から、船長自ら陥ち入っている、ものごとに対する認識の甘さが決定的に描き出される。ある意味で彼のなかに人間の理想像を見ようとしても、その不可能なことを、彼の破滅の過程によって知らなければならなくなる。いったい、それはどういうわけなのか。作家コンラッドの暗い、不安な凝視を理解するために、そのような問いを考えながら、話をすすめてゆこう。

ウェイリー船長はがっしりした身体つきの人間である。その落ち着いた風貌には、彼は1度も人生の苦難に出会ったり、その重荷を背負ったことがないかのように見える。じっさい、老船長ウェイリーの人柄を物語る経歴は、船乗りとして立派にやってきた過去の栄光に包まれている。彼の信じるものは、海の世界の価値観であり、いわゆる海の男の倫理である。つまり自然の暴威に負けない勇気や忍耐、船上社会の

秩序維持に必要な、目上に対する服従とか忠実、それに互いの信義、信頼といったものである。自分がその世界を信じているとはいえ、彼はこの信仰を、期待を込めてどんなひとにもあてはめる。マッシーと契約するとき、ウェイリー船長は彼の態度を、その卑屈な冗舌や怒りっぽさの発作を、どうしても好きになれない。ところが、それにもかかわらず、資金を効果的に運用したいこともあって、この船長は「だいたい、人間というのは悪いもんじゃない——ただ愚かか不幸なだけなんだ……そう、人間には、本当の悪というものはたいてない<sup>9)</sup>」と考えるほど、なにか素朴な、思考の甘い人間なのである。彼にとっては、ものごとの悪が自分勝手な利己心に根ざしているとか、不幸や貧困に原因しているなどは、やはり想像できない。作品『追いつめられて』の扱かう問題は、ひとつには、人間精神の暗い部分、悪というべきものの認識である。しかしウェイリー船長は豊かな想像力を欠いているので、この認識を得るのに自ら悪を行なうという、その犠牲者のような体験を経なければならない。

ウェイリー船長の現在は、その目覚しい過去に対し、かなり悲惨なものである。銀行倒産で財産を失ったのとすでに引退の身なので、彼は経済的にはほとんど余裕がない。そのうえ、妻は何年もまえに先き出ち、ひとり娘は結婚して、遠く離れた所で貧乏な生活を送っている。老人の彼は孤独を身にしみて感じており、娘に対する父性愛はそれだけいっそう強いのである。彼が出資してソファエラ号に乗り込んだあと、この老人はその余生、その仕事がただ自分のためだけでなく、娘のために必要なのだと考えてきている。そして失明に近い状態になってからも、彼はせつかく就いた船長の職を辞めることはしない。辞めれば出資金は戻らないだろうし、その金は、作品中何度も繰返えされるのだが、もはや娘の金という認識からである。ここらあたり、彼の陳腐な感傷癖がいささか鼻につくし、その動機や行為の説得力にかなり弱い感じもするが、ウェイリー船長の心の葛藤は、作品『追いつめられて』の主題の提示に不可欠なものとなっている。信義とか善意を信じる彼は、自己の裏切りの行為、失明状態をひた隠しにし、人びとの生命と積荷の安全を危険に陥し入れることで、良心の呵責を痛切に感じる。「『わたしの良心はどうしたのだとあなたは尋ねたかもしれません』…『わたしはそれを、自尊心のために勝手にだまし始めたのです』<sup>9)</sup>」と彼は告白している。そして視力を失なうことで、以前とは異なる状況に追いやられ、以前とは異なるものの見方を得て、彼も人間精神の悪の可能性を理解するかたちとなる。だから、悲しみにうちひしがれながら、彼は最後まで、与えられた道を大胆にすすまなければならない。「ウェイリー船長は態度を変えていなかった。それはなにか恥辱、悲しみ、それに挑戦の気持を表わしているようだった<sup>10)</sup>」ということばがある。結局ソファエラ号は暗礁に乗り上げるわけだが、その直前の彼の精神状況は、次のようにまとめられている。

マッシー氏は部屋を出るとき、1度うしろを振り返った。それからドアが締まり、ウェイリー船長はひとりで、前と同じように静かにすわっていた。自分のものといえるのを、彼はなにも持っていなかった——名誉ある過去、虚偽のない過去、正当な誇りに満ちた自分自身の過去さえなくなっていた。少しの汚れもない彼の全生涯は、急に墮落してしまったのだ。彼はその余生に最後の別れを告げてさえた。だが、あの娘のものは、彼はそれを救おうとした。ほんのわずかなお金だが、自分の手で娘の所に

持って行ってやろう——長すぎるほど生き永らえた人間の、この最後の贈物を。そう思うと、途方もなく大きな、烈しいひとつの衝動が、すさまじい父性愛そのものが、娘の顔をせつに見たいと望み、もはや無価値な生命でも、抑えられないほどそのありったけの力を込めて、ぱっと燃え上がった<sup>11)</sup>。

娘に対する父性愛がどんなものであれ、ウェイリー船長はあくまでその感情にしがみつく。明白な事実を無視して、彼はいわば夢の世界を抱き続ける。しかしここでは、夢といっても、たとえば過酷な現実を生き延びるためのひとつの潤滑油、というような創造的なものではない。彼の夢はたんなる願いにすぎず、その願いは、いまや盲目という状況から、きわめて現実味の薄いものである。そしてウェイリー船長も、最後には、そのことに気付いている。彼はただ、悲劇の王者にふさわしく、わずかな可能性に夢を託して、自らの役割を演じ抜くのである。

しかしながら、ウェイリー船長ははなはだ思考の甘い、素朴な海の男だった。悲劇がすすむにつれて、その楽観的なものの見方は、確実に皮肉な結果を生み出してゆく。ウェイリー船長はもともと、時代の流れや状況の変化に即応する、判断力や俊敏さを備えているというのではない。彼は人間の悪意を認めないし、神の助けを過信していて、まえにいくつかの試練に出会いながらも、警戒的な守りの姿勢など少しも取らない。彼にとっては、複雑な人間関係や細かな契約事項なんかは、まず苦手なものだったはずである。マッシーという人物は好きになれなかったが、彼は自分の人間観に従い、慣れた海の仕事なので、この男と契約を交わす。そしてそのときも、すでに老齢であるのに、ウェイリー船長は期間の途中で勤められなくなるかもしれない、などとはけっして心配しない。今まで神が助けてきてくれたし、神の恵みでこれからも病気にかかることはないだろうとたかをくくるのである。しかし彼の心には、自分の出資金はもう娘のものだという認識があるのだから、わずかな注意で、それに従った契約事項を作ることではできたはずである。契約とはほんらい、相手の利害とからんだひとつの取引だし、簡単に訂正できない厳しい性質のものだろう。ウェイリー船長はそのことを見過し、彼のいつものやり方、「彼の感じでそれまでまざったのは1度もなかった<sup>12)</sup>」という、いわば軽い気持ちで契約を行ない、視力喪失の不幸が重なって、徐々に追いつめられてゆくのである。そして破局の近くになっても、現実から離れた彼の思考の甘さは、ほとんど変わっていない。たとえば次のような引用は、船が暗礁とぶつかる描写の、ほんの少しまえに出て来る。これなど、そのような彼の思考様式のひとつの要約といっても、適当なものではないか。

このようにいつも注意が必要なので、ウェイリー船長はうそをついていることの屈辱感をしみじみ感じた。知らない間に彼がその状況へ陥ち入ったのも、父親としての愛情があり、こんなことはとうてい考えられなかったのと、人間たちの気持ちへ神が公平に割り当てる思いやりを、限りなく信頼していたからだった。もうひと月働いたかせぎを、かわいそうなアイヴィに送ってあげよう。たぶんこの病気も、すぐに直るかもしれない。神様だってきっと、わたしの援助の力を娘から奪い、はてしない闇のかへわたしを裸かのまま放り出すことは、なさらないだろう。彼はあらゆる希望にすがりついていた。そして自分の不幸の証拠が希望よりも強くなったとき、彼はその明白なことを、なんとか信じないよう

に心がけた<sup>13)</sup>。

ここで「その明白なこと」とは、もちろん、いまやほとんどもが見えない、ウェイリー船長の失明状態を指している。彼にとっては、それは酷しい現実であり、しかも彼の身にひしひしと押し寄せているものだった。ところが、それほどの切迫感はないにせよ、したがって彼はあまり意識していないが、その失明とは別の現実が、人間の善意と進歩を信じる彼を明らかに取り巻いていた。いうまでもなく、それを大ざっぱに、時代の変化と呼んで差し支えないだろう。

コンラッドの海の物語は、多かれ少なかれ、自己の体験に基づいており、それ故時代背景はほぼ19世紀の後半となっている。だいたい当時の海洋は、中国から新鮮なお茶を、オーストラリアから豊富な羊毛を運ぶ、いわゆる快速帆船の全盛期だが、推進機関の着実な発達によって、帆船がどうやら衰退し始め、徐々に汽船と交代してゆく時期でもある。そして航海術の進歩に助けられ、船乗りたちの仕事もだんだん肉体的な要素が少なくなってゆく。帆船での過酷な労働の意味や価値は失なわれ、船乗りたちのものの見方が変わってくる。作品『追いつめられて』の時代背景は、まさに海のこんな雰囲気包まれている。ウェイリー船長は50年におよぶ海上生活のうち、40年は東洋で過ごし、新しい航路や貿易の開拓者、未知の島や暗礁などの発見者として、輝やかしい名声を一身に浴びてきた。しかし現在67歳の彼にとっては、それも遠い昔の夢のことで、周囲の変化は確実にすすんでいるのである。作者コンラッドも、物語の初めのところで、さりげなくそのことに言及する。つまり「スエズ地峡の貫通は、ダム崩壊と似て、おびただしい数の新しい船、新しい人間、新しい貿易方法を東洋にもたらしていた。それは東洋の海の表情やその生活の精神までも変えてしまっており、そのためウェイリー船長の若い頃のさまざまな経験は、新しい世代の船乗りたちにとってまったく何の意味も持たなかった<sup>14)</sup>」と彼は説明している。スエズ運河の開通は1869年のことで、それによりヨーロッパから東洋への航路は、思いがけないほど短縮される。そして燃料補給地の必要も薄れて、速い汽船の需要が増大し、帆船の運命は急速に劣えてゆくのである。

ウェイリー船長が現在指揮するソファアラ号は帆船ではなく、ボイラーの故障が多い、小さな汽船である。それは東洋の狭い地域を周航する貿易船だが、この汽船のなかに、とにかくマッシーとスターンが乗り組んでいる。彼らはともに、自分勝手な欲望や抜け目ない駆け引きの持主で、いわば新しい世代の人間、『ナーシサス号の黒人』のドンキンの仲間である。したがって善意を示すとか美徳に生きるということはなく、彼らは古い世代の生き残りである、ウェイリー船長と対比されている。ところが船長の背信行為を知ったとき、たとえば新しい世代のそんなスターンさえ、あきれて気分が悪くなったほどである。作家のこぼれを使うと、「それは彼の思いもよらない厭わしいことであり、正直についての考えを脅やかし、彼の人間観を動揺させるものだった<sup>15)</sup>」ということになる。ウェイリー船長も、追いつめられた結果、いまや新しい世代を凌駕する、卑劣で利己的な人間に変わっている。そして彼自身このことを意識して、ものごとすべてに対する途方もない不信の念に襲われる。おそらく認識の甘さや視力喪失が引き金だったとはいえ、そんな彼の変貌のなかに、時代の流れに翻弄されている人間のすがたを、認めないわけにはいかないだろう。作者コンラッドの狙いのひとつはそこにもあって、彼は当然のことだが、その新しい時代を



是認できない。ウェイリー船長は最後に逃がれる機会を与えられながら、時代が移り変わって利己心とかどん欲のはびこる、新しい世界へ戻ることをしないのである。それにまた、彼の友人で、彼の行く末を見つめてきた人間の、悲しみに沈んだ凝視を見落してはいけないうらう。

作品『追いつめられて』の登場人物は非常に少なく、物語の展開に関係する人びとの数は、わずか4、5人程度である。そしてこの人間関係もごく単純なもので、ほとんど全部、ウェイリー船長を中心にしてゐる。それを大ざっぱにまとめてみると、まず船長とマライ人の水夫長との関係は、後者の前者に対する忠実によって信頼関係で結ばれ、そこから物語の進行に変化が生まれるわけではない。船長と娘アイヴィとの関係は、後者はじっさいにはほとんど登場しないものの、父性愛が船長の行動の動機となっており、物語の出発点といってよい。それから船長とマッシーやスターンとの関係だが、両者は対比されていて、とくに船長とマッシーの場合は、その交渉による船長の破滅の過程が物語の中心と考えられるので、物語の発展に深く関与している。ところが、以上のふたつほど直接かかりあわないのに、作品理解のうえで重要だと思われる人間関係がもうひとつある。それは船長と彼の友人のヴァン・ウィクとの関係で、この注目点は、前者の考え方が後者によって批判されたり、とりわけ前者の成り行きが後者の興味を引いているところである。作品『追いつめられて』は作者の全知の立場から物語られており、語り手が登場してくるものではない。つまりヴァン・ウィクは他の人間と同じように、普通の登場人物にすぎないのだが、その役割は少し趣きを異にしている。おそらく物語のそれぞれの要点が彼に伝えられることを見ると、彼の立場は物語の批判的観察者のそれに似ている。作者と主人公との関係は、ここでは、作者に近い登場人物と主人公との関係である。ウェイリー船長は名誉や信頼を重んじ、もともと他人の目を充分すぎるほど意識しているが、ヴァン・ウィクにとって、船長は友人であると同時にひとつの対象物であり、その破滅の過程から、いわば象徴的な意味合いを持つ人物になっている。だからこそ船長の結末は最後にヴァン・ウィクに知らされるのだし、その報告に対する彼の反応を物語の結論として、また作家の態度の表明として、見逃すことはできない。こういうウェイリー船長とヴァン・ウィクとの関係を、もう少し具体的に調べてみよう。

ヴァン・ウィクはウェイリー船長よりいくつか年上のオランダ人で、ソファーラ号の寄港するバツ・ベル河の河畔に住んでいる。彼はタバコ栽培の輝やかしい経歴の持主だが、現在は引退して、世間への嫌悪感から、自分でも世捨て人だと認める生活を送っている。ところが孤独な様子のウェイリー船長に、なぜか自分の懐疑主義が引き付けられ、彼は船長との交友を深めてくる。ヴァン・ウィクの性格や心理の説明はやや不十分なのだが、おそらくその態度は、人生を暗黒と嘆き、「冷たい無関心の態度が合理的な唯一の方法です。……結局のところ冷淡から滅びる運命の人類の行く末は、あれこれ悩むほどのものではありません。それを真剣に考えると、がまんできない悲劇になってしまいます<sup>16)</sup>」という作家コンラッドの考えから、それほど遠いものではないらう。古い世代のヴァン・ウィクは、もちろん、マッシーやスターンの自分勝手に陰険な振る舞いが好きになれない。しかし彼はまた、船長の楽観的な思いに疑問を投げかけ、そのうら軽蔑を感じる人間でもある。彼は船長を批判して、たとえば次のようにいうことができる。

「まあ、あなたもいつかは、わたしと同じ考え方になりますよ。これからも時間はたっぷりあります。老人だなんておっしゃらないで下さい。100歳になるまでお元気ですよ」

だが彼は例の辛つな態度を抑えられなかった。そのため情愛の深そうな微笑で気持を和らげながらも、彼は付け加えた。

「でも、その頃までには、あなたもたぶん、まったくの嫌悪感から死ぬことに同意なさるでしょう」  
ウェイリー船長は、こちらも笑いながら、首を振った。「まさか！<sup>17)</sup>」

ウェイリー船長とマッシーやスターンとの人間関係は緊張したものだが、彼とヴァン・ウィクのときはそうではない。ふたりの場合は同じ古い世代の信頼で結ばれ、その関係に自分勝手な欲望などは入らない。彼らはそれぞれ、心のうちを充分開いて接することができるし、現にそうしてゆくのである。だからウェイリー船長は、自分の本当のすがたが誤解されないよう、視力喪失の件をヴァン・ウィクに告白する。ヴァン・ウィクの方はそれに仰天するものの、次の航海がマッシーとの契約の最後なのを知って、その秘密を守り、船長の立場を理解するかたちとなる。しかしソファアラ号が出港するとき、彼はいつもと違って、棧橋までその見送りに出かけることをしない。物語はこのあと、船の沈没の経緯が描かれ、それから最後のまどめに移る。つまりヴァン・ウィクは、予定の時期にソファアラ号が戻らないことから、自分の心配は現実のものになったと知るのである。ある日のこと彼はスターンに会い、ウェイリー船長の最期の様子を聞く。また、船長とマッシーの契約が取り交わされた、事務所の弁護士は、ヴァン・ウィクの前で次のように回想する。すなわち、「『いわばとくにどこからということもなく、船長はわたしの事務所へやって来たんです。投資する500ポンドのお金を持ち、あの機関士の奴を不安そうに連れて。でもあのひとはもう、ちょうどやって来たときと同じように、少し不可解なまま逝ってしまいました』<sup>18)</sup>」と。しかしヴァン・ウィクにとって、船長はそれほど不可解なまま逝ってしまったわけではないし、彼の残した意味は決して小さくなかったはずである。作者コンラッドは、船長をひとりの象徴的な人物に近いものとみなせるよう、ヴァン・ウィクのその後の反応を書き忘れている。つまり彼は、これ以上新しい時代の東洋に住むことができず、祖国オランダへ帰る、というのである。こここのところは噂話としてただあっさり報告されるだけだが、おそらくそれは、彼が東洋の海に世代の交代を見て取り、すでに持っていた自己の認識を再確認した結果と考えてよいだろう。それは少なくとも、静かな余生を送ろうとする、彼の願いの表われだし、そのひとつの防衛策でもあるだろう。そしてこの辺には、たとえ外面的なものであれ、作家コンラッドの保守的心情が色濃く反映していると思われる。そこには結局、時代の変化と調和できず、いまや過去のものとなった世界にしがみついた人間の、苦しみと嘆きを見ないわけにはいかないだろう。ただ、ヴァン・ウィクのこの態度が妥当かどうかの判断は、また別の問題となる。その是非は、この作品の扱かうところではない。

『追いつめられて』は人間の老年期の物語である。この中編は、すでに述べたように、作品集『青春、ほか2編』の1編として書かれ、その最後に収められている。他の作品との関連を見ると、最初の短編「青春」では、青春期の人間の情熱とその時期の刹那さが、やや詠嘆的に扱かれる。次の中編『闇の

奥』では、政治の残酷な側面に接したり、人間精神の暗黒を見つめる、成人期の人間が描かれる。この『追いつめられて』は、同様に、悪というべき人間精神の暗黒面への認識や、世代の交代を扱かう物語、とってよいだろうか。そして「青春」と『闇の奥』は語り手マーロウによって語られるのだが、『追いつめられて』は作家の全知の立場から描かれ、そこに老年期のマーロウは登場しない。それ故、大ざっぱな方がいいのだが、主題と語りの両方から、これらの3部作はややまとまりを欠いており、本格的な連鎖小説のようにはなっていない。つまり3部作といっても、たとえば『追いつめられて』の執筆状況でわかるように、これらは便宜的に揃えられた感じが強く、良かれ悪しかれ、それぞれ立派に独立した存在だろう。作品集『青春、ほか2編』において人間の一生を扱かうというのは、ほんの表面的な意味にすぎず、けっして効果的に行なわれているわけではない。

NOTES

ジョウゼフ・コンラッドの作品は、現在の Dent's Collected Edition, Dent, London による。

- 1) Robert Graves : *The Crowning Privilege*, Cassell, 1955, p. 4.
- 2) G. Jean-Aubry : *Joseph Conrad : Life & Letters*, Volume One, Heinemann, 1927, p. 305.
- 3) William Blackburn (ed.) : *Joseph Conrad, Letters to William Blackwood and David S. Meldrum*, Duke University Press, 1958, p. 52.
- 4) *Ibid.*, p. 54.
- 5) G. Jean-Aubry : *op. cit.*, Volume Two, p. 338.
- 6) Norman Sherry (ed.) : *Conrad, The Critical Heritage*, Routledge & Kegan Paul, 1973, p. 142.
- 7) Joseph Conrad : *Youth, Heart of Darkness and The End of the Tether*, p. 332.
- 8) *Ibid.*, p. 215.
- 9) *Ibid.*, p. 300.
- 10) *Ibid.*, p. 302.
- 11) *Ibid.*, pp. 319-320.
- 12) *Ibid.*, p. 212.
- 13) *Ibid.*, p. 324.
- 14) *Ibid.*, p. 168.
- 15) *Ibid.*, p. 251.
- 16) C. T. Watts (ed.) : *Joseph Conrad's Letters to R. B. Cunninghame Graham*, Cambridge University Press, 1969, p. 65.
- 17) Joseph Conrad : *Youth, Heart of Darkness and The End of the Tether*, p. 291.
- 18) *Ibid.*, p. 336.